

年十一月二十五日だった。生きて日本の国に帰れた感動は何と素晴らしいことだった。

それにしても、樺太豊原の市街の家々に終戦直後、白旗やら赤旗が揚げられていたのにも拘らず、あの悲惨な空襲は避け得られなかったのか、そう思うのは私一人だけでないだろう。

引揚げて北海道砂川町の引揚者収容施設に、着のみで生活し、ヤミ米の買出し、かつぎ屋、組の土工夫等の生活は、まさに生きるための精一杯の努力だったのは、引揚者一同、等しく体験した歴史的事実である。

私の戦争体験記

北海道 兼 松 淳 子

恵須取は炭坑や製紙産業・林業・農産物も盛んで、人も四万人を越え、港を待ち、支庁所在地でもあり活気あふれた町でもあった。交換業務にたずさわっていた私、八月四日頃から通話通信も頻繁に悪い予感！誰もそ

れを話すことは出来ぬ。

八月七日突然、ソ連の飛行機襲来、夜は照明弾が町々をあやしく照らし、毎日日中偵察、夜照明弾、次の日から空襲、大きく黒い飛行機が低空にて爆撃、機銃掃射、十一日十二日一番ひどい爆撃、港町火災、十二日午後四時の勤務、浜市街まで歩いて局へ、母から短刀を渡された。言葉をかわすこともなく、無言で受取り元気で一言、それが家族との引き揚げてくるまでの別れであった。

夜の空襲はげしく局員とともに山の防空壕に避難、爆音が山に反響する。十三日朝突然ソ連軍上陸の知らせ、潜水艦、駆逐艦が出現、激しい艦砲射撃のあと上陸用舟艇、山つたいににげる。山の頂上から見たとき、ガスがかかった海の沖合に黒い船、沼の端山市街、中嶋町にくるまでに皆散りぢりになり、最後に佐藤さんと二人になり、町々も避難したと見えて、あまりの静けさに不気味、我が家も雑然、どんなにか急な避難命令かと佐藤さんと肝太まで走る。

武士町から少し行くと、避難の出おくれた人達が道路

をソロソロ、母親の背に赤ちゃん、老人幼い子供を背に、手に荷物、気はせくけど足進まず、人々に置いていかれる弱き者こそあわれ、道路外側に捨てられた荷物の山、空襲あるたびに犠牲者絶叫悲鳴、あわれな光景は言語に絶する。

上恵須取避難民多く集まり、家族との再会のドラマ、女子防空監視隊の活躍、男子とともに女子は髪を短く切り白鉢巻姿、汗やほこりにまみれて決死の姿、親と逢わないはぐれ鳥、私達は上恵須取局特定局と内路に行くまで交換業務をする。私共の仕事は最後これ以上については危ない。村を最後に出るので何時も老人おきざり、病人は馬車で負傷者も馬車、捨てられた子供達、通信の内容、恵須取銃撃戦、街は火の海、ところかまわず爆撃され小さな町も火災となり、切迫した戦況を知るや、くやし涙、友と手を取りあって泣く。珍恵道路をえらんだ避難民地獄そのもの、ソ連の上陸とぶつかり、真岡の悲劇が交換通信の戦場を守り、ソ連兵が迫り来るや乙女達の自決。又塔路太平洋炭坑病院看護婦の集団自決、上敷香兵隊自決、家族集団自決、此の世にありえない悲報を知る。

恵須取内路間二十六里山脈を横断する難路道一本道、下は深くて見えぬ。ソ連機爆撃見境もなく銃撃、死傷者は散乱惨状目をおおうものがある。ニギリ飯、塩辛い鮭の一切れで充たし、避難先々でニギリ飯にぎるのを手伝う。十九日降雨夜寒し、野宿、爆撃のときはカモラフージュに葉のしげった大きい木の蔭に避難する。

白雲峡で少し休みまた歩く、軍の車が何台も走る。頑張れとカンパン袋をいくつかなげてくれた。有難う涙。八月二十日内路へ避難した人々で町は騒然。局員交換の友達再会、喜び話も一時休むまもなく汽車が出るといので駅へ皆走る。大勢の人喧嘩ごし叫び声、誰もが我れ先死にもものぐらいに乗ろうと押し合い、体のいたさも忘れてようやく汽車にのれた。乗ったとたん発車、運良く客車の中で恵須取から避難してきた港の海運局の人達もいた。おたがいに労をねぎらい、交換の友達通信保険所十八人一緒になる。一路豊原、相談の結果大泊局へ行くことをきめた。豊原着何分間停車、大泊へ向かった最中に豊原空爆、駅も列車も爆撃にあい多くの死傷者が出た。局員の男の人も即死したと、犠牲者は弱いものに

重くのしかかってくる。

爆撃、停電、海底二千メートルの端島礦、 水没の梯子をよじ登る

北海道 中嶋 栄 吉

今日も毎日の様に一番方に入坑した。海底二千メートルの立坑を何分かって坑底に着いた。そこから現場迄尙約二十分ほどの坑道を歩いて現場に着いた。それからいつものような仕事をしていた午前十時半を過ぎた頃突然ビックリが止まった。

昇坑にいて仕事をしていた自分らがビックリして下の坑道に下りて来たときには付近から電気が止まった大変だ空気が送られてこなくなるし、海底の水を汲みあげるポンプが止まるようなことになれば大変だだちに立て坑下に行こうと行って係員が先になり五人また十人と次々あつち、こつちから集まって立坑下に来たときには先に来た人達を立坑側にある鉄梯子を登って行く人々を

順を待ちながら見守っていた。

坑道はひざ近くまで水がたまって来ている。係員の説明が初めてあった、高島坑の発電所が爆撃され、高島坑も端島坑も完全に電気のない廃坑となってしまったので、我々は生きるためにこの梯子を登って外に出るしかない、皆落着いて体には何もたず皆が昇って行く鉄梯子を身一つで一步一步昇って生きることと、言い聞かされた。

上を見あげれば遠々点々と灯が並び、「よいしょ」「よいしょ」と皆が声をそろえて誰ともなく腹の底から出る生きるための梯子昇りが始まった、三、四メートル毎に一囲りする短い梯子を約二千メートルの海の底からすき腹も忘れて約一時間半かかって全身汗びっしょびしょになってやっと外のあかりが見えて来たときは、我ながらよくぞ昇って来たとうれしくなり、妻子の顔が始めて思い浮かぶ気持ちが出て来ました。

元氣を出して最後の出口に昇り付いたとき、外回りに大勢の人々がいて最後の手を差し出したとき誰か知らんが暖かい手がしっかりと私の手をつかんで「御苦労さ